

Title	Feasibility of cognitive remediation therapy for adults with autism spectrum disorders: a single-group pilot study
Author(s)	奥田, 朋子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69249
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (奥田 朋子)

論文題名

Feasibility of cognitive remediation therapy for adults with autism spectrum disorders: a single-group pilot study (大人の自閉スペクトラム症に対する認知機能改善療法の実用可能性:パイロット研究)

論文内容の要旨

〔目的〕

自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorders: ASD) の認知特性には、全体を把握することが難しく、情報の細かい部分に注目しやすいcentral coherenceの弱さと、場面に応じて新しい戦略を適用することが苦手であるset shiftingの難しさが挙げられるが、これらは神経性やせ症 (Anorexia Nervosa: AN) の認知特性と類似していると言われる (Mandy et al., 2015)。ANの治療においてCRTが有効であるとされるが (Tchanturia et al., 2008)、CRTはcentral coherenceやset shiftingに関する認知機能の改善を目的として思考スタイルや方略に働きかける心理的介入方法であり、認知エクササイズやホームワークを通して日常生活上の行動変化を狙いとする。直接対象者の問題を扱わない点で侵襲性が低く (Tchanturia et al., 2008)、他の介入よりもドロップアウト率が低いという報告があり (Abbate-Daga et al., 2012)、先行研究では体重やbody mass index (BMI) の改善、課題遂行の改善、思考柔軟性の改善等に有効であるという報告がある (Cwojdzinska et al., 2009)。しかし、ANと類似した認知特性を持つASDを対象としたCRTの研究はまだ報告されていない。そこで本研究では、ANで用いられているマニュアルを用いてCRTを実施し、その介入の実施安全面と臨床効果の面で検討し、ASDへのCRTの適用可能性を探索的に調べることを目的とした。

〔方法ならびに成績〕

研究方法として、10週のCRTプログラムによる介入を、対照群を設置しないsingle armによるopen trialで実施した。主要評価項目は、ANのCRT研究で主に使用されている、レイ複雑図形テストを用い、central coherenceについて評価を行った。また副次評価項目として、ブリクストンテストを用いてset shiftingについて評価を行った。対象者は18-50歳のASD患者とした。評価はCRT開始前、CRT10回終了後、3ヶ月後に行い、16名の研究参加者が完遂した。セッションでは「Cognitive Remediation Therapy for Anorexia」 (Tchanturia et al., Institute of Psychiatry, London, UK, 2010) の日本語訳したものを使用し、CRTワークショップを修了した3名のセラピストで実施した。

介入の結果、レイ複雑図形検査の全体評価およびスタイル評価において時点の主効果が有意であったため、多重比較検定を行ったところ、介入前と介入後、および介入前と介入終了後3ヶ月後の時点で有意差が認められた。またGAD-7、HADSの不安に関しても時点の主効果が認められ、多重比較検定を行ったところ、介入前と介入後の間で有意差が認められたが、介入前と介入終了後3ヶ月後の比較では有意差は認められなかった。一方、ブリクストンテストでは時点の主効果は認められなかった。

本研究におけるドロップアウト率は15.8%であり、ANを対象とした先行研究と比較すると高いドロップアウト率であるが (0~13%)、ASDを対象とした他の介入研究のドロップアウト率と比較すると範囲内であり (0~18%)、ASDにCRTを施行可能であることが示唆された。しかしASD向けにプログラムの修正は必要であることが示唆された。

〔総括〕

研究の限界として、対照群の設置の不備、学習効果の影響が挙げられるものの、ASDに対してCRTを実施適用することについては可能であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (奥田 朋子)	
論文審査担当者	(職) 氏 名 主 査 教 授 武 井 教 使
	副 査 教 授 片 山 泰 一
	副 査 准 教 授 酒 井 佐 枝 子

論文審査の結果の要旨

本研究論文は、神経性やせ症 (Anorexia Nervosa: AN) を対象とした認知機能改善療法 (cognitive remediation therapy: CRT) のマニュアルを自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorders: ASD) の大人に適用可能であるかを検証したパイロットスタディである。

ASDの認知特性には、全体を把握することが難しく、情報の細かい部分に注目しやすいcentral coherenceの弱さと、場面に応じて新しい戦略を適用することが苦手であるset shiftingの難しさが挙げられるが、これらはANの認知特性と類似していると言われる (Mandy et al., 2015)。ANの治療においてCRTが有効であるとされるが (Tchanturia et al., 2008)、CRTはcentral coherenceやset shiftingに関する認知機能の改善を目的として思考スタイルや方略に働きかける心理的介入方法であり、認知エクササイズやホームワークを通して日常生活上の行動変化を狙いとする。直接対象者の問題を扱わない点で侵襲性が低く (Tchanturia, 2008)、他の介入よりもドロップアウト率が低いという報告があり、先行研究では体重やbody mass index (BMI) の改善、課題遂行の改善、思考柔軟性の改善等に有効であるという報告がある (Cwojdzinska et al., 2009)。しかし、ANと類似した認知特性を持つASDを対象としたCRTの研究はまだ報告されていない。そこで本研究では、ANで用いられているマニュアルを用いてCRTを実施し、その介入の実施安全面と臨床効果の面で検討し、ASDへのCRTの適用可能性を探索的に調べることを目的とした。

研究方法として、10週のCRTプログラムによる介入を、対照群を設置しないsingle armによるopen trialで実施した。主要評価項目は、ANのCRT研究で主に使用されている、レイ複雑図形テストを用い、central coherenceについて評価を行った。また副次評価項目として、ブリクストンテストを用いてset shiftingについて評価を行った。対象者は18-50歳のASD患者とした。評価はCRT開始前、CRT10回終了後、3ヶ月後に行い、16名の研究参加者が完遂した。セッションでは「Cognitive Remediation Therapy for Anorexia」 (Tchanturia et al., Institute of Psychiatry, London, UK, 2010) の日本語訳したものを使用し、CRTワークショップを修了した3名のセラピストで実施した。

介入の結果、レイ複雑図形検査の全体評価およびスタイル評価において時点の主効果が有意であったため、多重比較検定を行ったところ、介入前と介入後、および介入前と介入終了後3ヶ月後の時点で有意差が認められた。またGAD-7、HADSの不安に関しても時点の主効果が認められ、多重比較検定を行ったところ、介入前と介入後の間で有意差が認められたが、介入前と介入終了後3ヶ月後の比較では有意差は認められなかった。一方、ブリクストンテストでは時点の主効果は認められなかった。

本研究におけるドロップアウト率は15.8%であり、ANを対象とした先行研究と比較すると高いドロップアウト率であるが (0~13%)、ASDを対象とした他の介入研究のドロップアウト率と比較すると範囲内であり (0~18%)、ASDにCRTを施行可能であることが示唆された。しかしASD向けにプログラムの修正は必要であることが示唆された。

これらの結果、診断の厳密化や対照群の設置、評価項目の検討が必要であるものの、ASDに対してCRTを実施適用することについては可能であることが示されたもので、学位に値すると認める。